

「私

が研究している分野は森林風景計画学といわれる分野で、一般的には森林を使って綺麗な風景を作ることの研究しているようにとらえられがちです。これも一つの側面ではありますが、基本的には風景を手段として、人と環境とか人とコミュニティ（地域社会）の関係を良好に保つための計画論をテーマとしています。もう少しはつきり言えば、綺麗な風景や森林を作ることが目的ではありません。風景というものを手段として用いながら、人と環境、人とコミュニティの関係を良好に保つことができれば、結果として風景は魅力的になるでしょうというのが我々のスタンスです」と説明を始めたのは東京大学大学院教授で造園学、観光・レクリエーション計画を専門分野とする森林風致計画学研究室の下村彰男教授です。

「心理学の分野で図（Figure）と地（Ground）という概念があります。図は形として認識されるもの、地は背景として一体的に見られ個々は判別されないものとなりますが、森林は一般的に地として認識され、人々の意識にのぼる存在ではありません。しかし、地域の暮らしと合わせて森林風景を見ていただければ興味深い存在として認識されるのではないかと考えています。例えば、かつて樽材生産を目的とし、最初は杉一万本の密植から利用間伐を繰り返す吉野のスギ林は柔らかな林相を呈し、杉三千本の挿し木植栽で構造物の単層林育成を行う日田のスギ林は鋭く整った林相を呈するといったように地域によりその風景は大きく異なります。農業は一年で収穫されてしまいますが、森林は息の長い生産期間を有しており、このため森林の風景はコミュニティがどう維持されてきたかを表す貴重な指標であり、地域の様子を理解

## 緑のエッセー

東京大学大学院 森林風致計画学研究室 教授

### 下村 彰男

しもむら あきお

昭和30年兵庫県生まれ、昭和53年東京大学農学部林学科卒業、平成5年東京大学農学部博士号取得、同年東京大学農学部助教授、平成13年東京大学大学院農学生命科学研究科教授



する有効な手段ともなります。こういう森林風景の相違を、そのバックグラウンドとともに説明することで、森林を地から図にしていくことが出来るのではないかと考えています」と、森林そのものの状態に目を向けるよりも、その森林がどう形成されてきたか履歴や地域の状態と合わせたものを重視すべきと主張しています。

その上で「産業経済の時代を近代とすれば、この時代は画一品の大量生産ということでも地域毎の差異を切り捨ててきた時代でした。この時代が終わり今情報の時代へと移行しつつあり、あらゆる面で模索が続けられています。私のもう一つの専門は観光計画ですが、近代の観光は周遊型でした。これがなくなつたとは言いませんが、最近では滞在型と呼ばれ、癒しや文化性を求める観光に移行しつつあります。各地の個性的な風景や料理、暮らしなどを楽しみながら自己実現につながる旅の私たちです。このような時だからこそ森林も図としての位置づけができれば、十分に観光資源として機能すると考えます。私の研究室では森林景観マップを制作中ですが、風景や景観が形作られた社会環境、経済構造、地域社会情勢などを盛り込んで説明していけば、これは素晴らしい観光資源になると考えています。都市のお金を地域に還元することはいつの時代も大命題であり、近代は税金と第一次産業がその役割を担ってきました。今その仕組みが立ちゆかなくなり山村再生が大きな課題となつて、森林・林業の振興が叫ばれています。人とコミュニティの関係を良好にすること、そのツールとして森林風景を用いることで地域の観光資源性が高まり、都市の人々との交流が活性化すると考えています」として、地域に人を呼び込むことの必要性とその手段を指摘しています。